

## 「生き返った一人息子」

ルカの福音書 7:11~17



### はじめに

前回は、カペナウムにいた一人の百人隊長のその信仰に目をとめられたイエシュアの奇蹟の出来事でした。イエシュアは彼の信仰のゆえに癒やしの御業をなされました。今日の箇所にもイエシュアの驚くべき奇蹟が描かれています。それは癒やしどころではない、死人が生き返るといふものです。しかしそのような大きな奇蹟とは裏腹に、また前回とは大きく違い、そこには誰の信仰も、そのような言葉さえもなく、誰の祈りも、願いも見受けられません。ではどのようにして、どのような理由からこの偉大な奇蹟はなされたのでしょうか。今日もヘブル語の視点から、神のご計画の視点からこれを読み解いてまいりましょう。

### 1. ナイン

ルカの福音書【新改訳 2017】

7:11 それから間もなく、イエスはナインという町に行かれた。弟子たちと大勢の群衆も一緒に行った。

ガリラヤの南部に位置する「ナイン(נַיִן)」という町が今回の舞台です。「好ましい、美しい」地という意味のナーエム(נָאֵם)がこの町の名の由来となっています。

創世記【新改訳 2017】

49:14 イッサカルは、たくましいろば、二つの鞆袋の間に身を伏せる。

49:15 彼は、休息の地が快く、その地が美しいのを見る。しかし、肩は重荷を負ってたわみ、苦役を強いられる奴隷となる。



ナインの周辺地域一帯は、かつてイスラエル十二部族の一つ、イッサカル族の相続地でした(ヨシュア記 19:17~23)。父祖ヤコブすなわちイスラエルは彼らについて上記の預言を残しており、そこに聖書で最初のナーエムが使われています。しかしこの預言はイッサカル族だけに対するものというよりはむしろ、イスラエルの全十二部族、ユダヤ人全体についてのものと解釈できます。なぜならかつて主はこのように仰せになられたからです。

出エジプト記【新改訳 2017】

3:6 さらに仰せられた。「わたしはあなたの父祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」

3:7 【主】は言われた。「わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみを確かに見、追い立てる者たちの前での彼らの叫びを聞いた。わたしは彼らの痛みを確かに知っている。

3:8 わたしが下って来たのは、エジプトの手から彼らを救い出し、その地から、広く良い地、乳と蜜の流れる地に、カナン人、ヒッタイト人、アモリ人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人のいる場所に、彼らを導き上げるためである。

これは主がモーセに語られたものです。この後彼はイスラエルの預言者、指導者として立ち、当時エジプトの奴隷となっていたイスラエルの民をその苦しみから救い出し、「広く良い地、乳と蜜の流れる地」ヤコブが預言したナーエーム「麗しい」地へと導きます。この出来事にとどまらず、イスラエルの歴史は奴隷と解放の連続です。そして終わりの日にはその究極的現れである黙示録の獣、反キリストによる迫害、圧政を受けることとなります。それが「肩は重荷を負ってたわみ、苦役を強いられる奴隷となる」というヤコブの預言の究極的な成就となります。しかしモーセがしたように、やがて地上再臨されるメシア、イエシュアによって解放と救いの御業が表され、イスラエルは「神の国」という「休息の地」ナーエーム「地が麗しいのを見る」こととなります。ヤコブの預言はこの奴隷と解放、苦役と安息の預言が逆順に記されていますが、これは聖書の特徴、書き記させた神の特徴で、主はまず結論、完成を提示した上でそこに至る経緯を述べられる御方なのです。ともかく、「ナイン」という名とそこにイエシュアが行かれたという事実には、このような神のご計画が秘められており、この記述はただの状況説明ではないということを感じていただきたいのです。

さらにここでイエシュアは「弟子たちと大勢の群衆も一緒に行った」とあり、これもまたただの描写ではなく、以下の預言を指し示したものです。

#### ユダの手紙【新改訳 2017】

1:14 アダムから七代目のエノクも、彼らについてこう預言しました。「見よ、主は何万もの聖徒を引き連れて来られる。

#### ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

19:11 また私は、天が開かれているのを見た。すると見よ、白い馬がいた。それに乗っている方は「確かで真実な方」と呼ばれ、義をもってさばき、戦いをされる。

19:12 その目は燃える炎のようであり、その頭には多くの王冠があり、ご自分のほかはだれも知らない名が記されていた。

19:13 その方は血に染まった衣をまとい、その名は「神のことば」と呼ばれていた。

19:14 天の軍勢は白くきよい亜麻布を着て、白い馬に乗って彼に従っていた。

反キリストの圧政を打ち砕き、イスラエルをその苦しみから救い出し、「神の国」という「麗しい」地に導き入れる、それが神のご計画の完成、目的です。イエシュアはこのように多くの天の軍勢を率い、やがて地上に再臨されます。その事実がこのように「大勢の群衆も一緒に…」と記された描写の細部に至るまで表されているのです。このように聖書にはあっさり読み進んだり、読み飛ばしたりして良い箇所などひとつもありません。そのいたるところに神のご計画が秘められているからです。そしてこのように捉えるならば、次に記されている出来事もまた同様に、神のご計画を指し示したものと見ることができます。

## 2. やもめ

#### ルカの福音書【新改訳 2017】

7:12 イエスが町の門に近づかれると、見よ、ある母親の一人息子が、死んで担ぎ出されるところであった。その母親はやもめで、その町の人々が大勢、彼女に付き添っていた。

ここに、夫を失い、さらに今一人息子を失ったという一人の女性「やもめ」が登場します。これをヘブル語でアルマーナー(הַמְּנָנָה)といい、この言葉が聖書で最初に使われたのは創世記 38:11 です。

### 創世記【新改訳 2017】

38:6 ユダはその長子エルに妻を迎えた。名前はタマルといった。

38:7 しかし、ユダの長子エルは【主】の目に悪しき者であったので、【主】は彼を殺された。

38:11 ユダは嫁のタマルに、「…あなたの父の家でやもめのまま暮らしなさい」と言った…タマルは父の家に行き、そこで暮らした。

これはタマルという女性についてのものです。彼女は後にアブラハムの系図にも記され、その血筋からイエシュアが生まれるという人物です（マタイ 1:3）。彼女の夫たちはみな「主の目に悪しき者であった」ので殺されました。その結果タマルは「父の家」で暮らす者となりました。このように「やもめ」アルマーナーとは本来、主によって悪しき者たちの支配から解放され、「父の家」で暮らす、住む、生きようになることを指し示す言葉なのです。ここに先に示された「ナイン」という名に秘められた神のご計画が結びついてきます。つまりこの「やもめ」は、悪しき者の典型である獣、反キリストが滅ぼされ、その脅威から解放、救い出され、父なる神の家「神の国」に住み、生きようになるイスラエルの民、ユダヤ人を表した「型」だということです。一般的な概念としてのやもめ、未亡人は、ただ不幸でかわいそうな人というだけの意味しかありませんが、ヘブル語のアルマーナーにはこのように、神のご計画を指し示す意味が秘められているのです。

ではこの「やもめ」が亡くした一人息子とは誰でしょうか。聖書で最初のやもめ、タマルはイエシュアに至る系図に記されていると述べました。つまりこの出来事はイスラエルの民が御子イエシュアを死なせてしまったこと、すなわちイエシュアの十字架の死の事実を指し示しているのです。

### 3. 子宮

#### ルカの福音書【新改訳 2017】

7:13 主はその母親を見て深くあわれみ、「泣かなくてもよい」と言われた。

7:14 そして近寄って棺に触れられると、担いでいた人たちは立ち止まった。イエスは言われた。「若者よ、あなたに言う。起きなさい。」

7:15 すると、その死人が起き上がって、ものを言い始めた。イエスは彼を母親に返された。

7:16 人々はみな恐れを抱き、「偉大な預言者が私たちのうちに現れた」とか、「神がご自分の民を顧みてくださった」と言って、神をあがめた。

7:17 イエスについてのこの話は、ユダヤ全土と周辺の地域一帯に広まった。

イエシュアは「深くあわれみ」とあります。ここにはラーハム(רַחֵם)という言葉が使われていますが、これはもともと「子宮、胎」という意味のレヘム(רֶחֶם)から出た言葉です。子宮、母の胎とは命を宿し、生み出す場所です。ここでイエシュアは私たちが一般的に抱いている「あわれむ、かわいそうに思う」という動機で死人を生き返らせたのではありません。新しい命が母の胎から生まれ出て来るように、やがて

ご自身が全く新しい身体、朽ちることのない永遠の肉体をもってよみがえられること、復活されることを指し示すために「深くあわれみ」、この御業を成されたのです。ちなみにギリシャ語ではこれを子宮ではなく「はらわた、腸」と解釈するそうですが、腸は命どころか死んだもの、便所に捨てられる汚物しか出しません。ここにギリシャ語で聖書を理解することのズレ、神に対する誤解が生じます。ギリシャ語で聖書を学ばれた方、今も学んでおられる方には残念なお知らせですが、聖書を理解する上でヘブル語とギリシャ語では、このように「命とうんこ」ほどの違い、雲泥の差があることを知ってください。

このように、ご自分の死と復活を指し示すためにイエシュアはこのようにして若者を生き返らせました。ここで「その死人が起き上がって」とありますが、ここに使われているワード(טוּן)は本来は「戒める、警告する」という、全く違う意味をもった言葉なのです。この最初の言及は創世記 43:3 です。

#### 創世記【新改訳 2017】

43:1 さて、その地の飢饉は激しかった。

43:2 彼らがエジプトから持って来た穀物を食べ尽くしたとき、父は彼らに言った。「また行って、われわれのために食糧を少し買って来てくれ。」

43:3 すると、ユダが父に言った。「あの方は私たちを厳しく戒めて、『おまえたちの弟と一緒になければ、私の顔を見てはならない』と言いました。」

これはエジプトの宰相、権力者となったヨセフが、ヤコブすなわちイスラエルの息子たちにワード「厳しく戒めて」言ったものです。その内容は、兄弟全員揃って「一緒に」にヨセフの顔を見る、会いに行くというものでした。つまりイエシュアによって「死人が起き上がっ」たというこの事実にはヨセフの子とも呼ばれたイエシュア（ヨハネ 1:45）のみもとにイスラエルの息子たちすなわち十二部族が必ず集められなければならない、という神のご計画が表されているのです。ここに秘められた奥義はこのようにヘブル語でなければ決して知ることのできないものです。さらに、イエシュアが「彼を母親に返された」という描写もまた同様の事実を指し示しており、やがてイエシュアがイスラエルの民のもとに帰って来られること、地上再臨されることが「型」として表されているのです。やもめに対してイエシュアは「泣かなくてもよい」と言われました。つまり当然のことながら彼女は泣いていたのです。イエシュアの十字架の死を嘆いたユダヤ人はわずかでしたが、イエシュアが帰って来られる、地上再臨の際には全イスラエルが泣きます。こう預言されているとおりです。

#### ゼカリヤ書【新改訳 2017】

12:9 その日、わたしはエルサレムに攻めて来るすべての国々を根絶やしにしよう。

12:10 わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、恵みと嘆願の霊を注ぐ。彼らは、自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見て、ひとり子を失って嘆くかのように、その者のために嘆き、長子を失って激しく泣くかのように、その者のために激しく泣く。

このように、イエシュアの十字架の死と復活、そして終わりの日の地上再臨が重ね合わさるように今日のこの奇蹟の記述には秘められているのです。これこそがまさにイスラエルの「神がご自分の民を顧みてくださ」る出来事であると言えるのです。そしてイスラエルの王、メシアであるイエシュアの御名とその統

治は「ユダヤ全土と周辺の地域一帯」から全世界に及ぶものとなるのです。それが「神の国」千年王国、メシア王国とも呼ばれる神のご計画の完成です。

#### 4. あわれみ

出エジプト記【新改訳 2017】

33:18 モーセは言った。「どうか、あなたの栄光を私に見せてください。」

33:19 主は言われた。「わたし自身、わたしのあらゆる良きものをあなたの前に通らせ、【主】の名であなたの前に宣言する。わたしは恵もうと思う者を恵み、あわれもうと思う者をあわれむ。」

この御言葉は、今日取り上げたイエシュアのあわれみ、ラーハムという言葉が聖書で最初に使われた箇所です。「わたしは恵もうと思う者を恵み、あわれもうと思う者をあわれむ」とあるように、主がラーハム、あわれみをかけられる対象とは、対象者の外見や努力や能力ではなく、ただ主の御心、選びによることが示されています。そしてその対象として選ばれているのがアブラハム、イサク、ヤコブの子孫であるイスラエルの民です。彼らに対する神のあわれみ、救い、「神の国」の民となるという約束、計画は、ただ主の一方的な、まさに独断と偏見によるものなのです。

ここで前回取り上げたカペナウムの百人隊長についての出来事を思い返してください。彼は自分のしもべの癒しをイエシュアに求めていましたが、イエシュアが目をとめられたのは彼の信仰でした。「イスラエルのうちでも、これほどの信仰を見たことがありません（ルカ 7:9）」とイエシュアが言われたように、主の御業はその信仰のゆえになされました。そして前回のこれらの出来事にはイエシュアの空中再臨による携拳（I テサロニケ人への手紙 4:16~17）の事実が表されていると解き明かしました。つまり携拳によって救われる者には、イエシュアを権威者、神と信じる信仰が与えられ、その信仰のゆえに救われる、携拳されるということです。しかし今日取り上げた箇所に型として示されているイスラエルに対する救いは、彼らの信仰ではなく、主がイスラエルをあわれもうと思われた、そのように予め定められたがゆえのあわれみ、主の一方的な選びによるものであるということが示されているのです。もちろんそれは主がイスラエルの父祖アブラハムに約束され、聖書に記された以下の御言葉のゆえです。

創世記【新改訳 2017】

12:1 【主】はアブラムに言われた。「あなたは、あなたの土地、あなたの親族、あなたの父の家を離れて、わたしが示す地へ行きなさい。

12:2 そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとする。あなたは祝福となりなさい。

12:3 わたしは、あなたを祝福する者を祝福し、あなたを呪う者をのろう。地のすべての部族は、あなたによって祝福される。」

これが成就するのがイスラエルに対する神の救いの御業であり、「神の国」の完成です。このように救いの完成、成就である「神の国」には二つの道筋があり、一つはイエシュアを神として信じる信仰によって携拳されること、そしてもう一つは今日取り上げた、イスラエルに対する主のあわれみによる救いです。

道筋は二つですが、そのどちらもが神の御子イエシュア、イエス・キリストとも呼ばれるこの御方によってのみ成し遂げられるのです。

使徒の働き【新改訳 2017】

4:10 皆さんも、またイスラエルのすべての民も、知っていただきたい。この人が治ってあなたがたの前に立っているのは、あなたがたが十字架につけ、神が死者の中からよみがえらせたナザレ人イエス・キリストの名によることです。

4:11 『あなたがた家を建てる者たちに捨てられた石、それが要の石となった』というのは、この方のことです。

4:12 この方以外には、だれによっても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人間に与えられていないからです。」

イエシュアは私たち教会を、そしてイスラエルを救われる御方です。決して今の皆さんの生活を安定させ、様々な問題を解決する道具ではありません。私たちのためにイエシュアがおられるわけではありません。イエシュアのために、神である主のために私たちがいるのです。主に従ってまいりましょう、主とともに歩んでまいりましょう。それは主が見ておられるものを見、主が目指しておられるその先を見ることです。そしてそこから目を離さないことです。聖書はそのための本です。これからもともに聖書に親しんでまいりましょう。聖霊の助けがありますように。